

ねられぬまゝに更し月みる

東くめ子

つらゝる瀧川の瀬にくだかれて

いよゝつめたき月の影かな

田中たを子

風寒み都大路も人たえて

我影さびし冬の夜の月

有賀晴子

高さひくき家々のかげを地になげて

こほるが如し冬の夜の月

大竹伊勢子

夜鳥のなく聲寒み見あぐれは

色なき枝に月冴えわたる

中村文子

のろりべに語りふかして友が門

いづればさむし冬の夜の月

久保花子

風寒み人通りなき川添の

霜の上照らす冬の夜の月

森田妙子

車やのしはぶさやみて橋のもと

北風寒く月さえわたる

慶野華子

冬の夜の月は軒端にかゝりけり

かれし木立を庭にゑがきて

吉田静子

はりつめし池の氷に影さえて

いとくさびし冬の夜の月

紅梅

牧

羊

去年うつし栽えし

紅梅一本

霜をやぶりて

南の枝ゆ

一輪二輪

今朝咲き初めぬ

幼兒一人

我を見上げて

『お父つあんの

お顔の様だわ

あの花の色は』

『さなり我子よ

あの花こそは

花の魁

年の始めの

屠蘇に酔ひつゝ

父もろともにも
ことほぐなるらん』

ゆるぎなき御代

かるた遊び

わづま

かるたとるとて

源氏平家と

きはひさやめく

むべ山風の

源氏の方の

秋の草木に

しをればてゝぞ

つどふ友どち
たち分れつゝ

聲ぞにきはふ

われにあれつゝ

勝ちに勇めば

わらぬ平家の

かこち顔なる

ひとゝせ

つねを

うらゝ霞む春の朝

治まる御代のをほぎを

青葉しげれる夏の暮

いつか涼しき橋の上

聲をさそひてうたはまし

鳴く鳥の音にわはせつゝ

星の光にあこがれて

登追ひ行く少女子と

空も露けき秋の夜の うきことながき山鳥の

頭に霜のかゝるまで 澄み行く月をながめつゝ

北風さむき冬の月や 柴の戸閉てわたゝかく

語らふ折やいつのまに 雪に見なれぬ花の庭

花の下かげ池の水 月の光や雪の窓

夢見るまゝにかはりきて ひととせながら面白し

お年玉

みづ子

小石川の護國寺の西に、杉の生垣を繞らした風

流な庭のある、小じんまりとした二階家に、長のス

ラリとした何處となく重々しい、年の頃五十許り

の奥さんが、たつた一人で住んで居りました。

此奥さんは元某大尉の長女で、十八の時、大

教育家といはれた〇〇女学校の校長松田秀雄の所

へお嫁に来たのでありましたが、今から三年程前